
Ben10 third burst **まるおかが動いた頃に**

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ben10 third burst まるおかが動いた頃に

【コード】

N8404J

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

2005年の悲劇を、変えるべく立ち向かった日米連合配管工部隊。ハイブリードが支配する運命を贖うことができるのか？

第一話 ヒーロータイムだっ！（前書き）

この作品は、おそらく秘密兵器に近い存在です。なので楽しみに見てください。

第一話 ヒーロータイムだっ！

某県丸岡町。

時は、1983年11月3日。

丸岡配管工部隊は、雛見沢に何らかの連絡が入っていることを知った。

それは、エイリアンの襲撃だった。

それから3年後。

1986年4月2日の丸岡町。

そこに雛見沢から引越した園崎家がいた。

丸岡配管工部隊隊長浅井山智熱の姿がいた。

「雛見沢配管工部隊隊長園崎お魎さん、はじめまして丸岡配管工部隊隊長浅井山智熱です。」

お魎は、にこやかに握手を交わした。

「1983年11月のエイリアン事件を知っています。」

魅音は、驚いた。

「えっ、知っているの!」

「1983年11月3日の日に起こった出来事は、知って当然だ。それは、確かハイブリードと言われるエイリアンだったよね。結局のところ倒せなかったというあのオヤシロ様が立ち向かったが、惜しくもやられ難見沢は、ハイブリードのアジトになってしまった。大丈夫、未来のアメリカから配管工部隊を連れて来てやる。」

まるおかが動いた頃に

原作　　ひぐらしのなく頃に　　ベン10　　台風X号オールスターズ

企画　　まるおかが動いた頃に制作委員会と言っても台風X号一人で考えているけどね。

第一話　　ヒーロータイムだっ！

2005年アメリカ、ベン・テニスのいる学校付近半径250メートル。

配管工部隊は、最大の危機を迎えていた。

ハイブリードの地球侵略だ。

「信じられない、しかもハイブリードと戦っている。そして人が次々とDNAリアンに殺されて行く。」

紗都子は、怖がっていた。

智熱は、エイリアンチップを使おうと考えたが無駄な力ここでは使わないことを決意していた。

「もし、これがハイブリードを生かすすぎた世界なら、バッドエンドということになる。つまり、オヤシロ様言いたがっていたことは分かった。」

吉政は、ハイブリードの強さを見た。

そしてそれに逃げるベンとグウエン達を古手梨花が止めた。

「あなた達は、この元凶を知っているのですか？」

マックス・テニスン達は、知らないといった。

「なら、連れててあげるわ1984年1月6日に。」

まるおかが動いた頃に

1984年1月6日の雛見沢村。

そこはすでにハイブリードのアジトになってしまった。

村は、宇宙技術によって書き換えられてしまった。

「これが、元凶よ。」

「さかのぼれば1983年11月2日に行くわよ。」

浅井山智熱は、まだ平和だった雛見沢に来た。

そこはまだ楽園と言えたが、1983年11月3日にタイムスリッ

プした。

「これのどこが、楽園。」

人々の何人かは、死んだ。

更には御三家のひとつが消えてなくなった。

「羽入、無茶しないで。」

「自分は、オヤシロ様だからこんなエイリアンに倒されてたまるもんですか。」

そして3年後にさかのぼった。

ベンは、言った。

「梨花ちゃん。そのあとオヤシロ様という名を持つ羽入ちゃんは？」

「残念ながら、ハイブリードにやられて、満身創痍どころか死の直前だったのですう。」

ベンは、闘いの元凶が雛見沢でハイブリードとオヤシロ様の闘いでオヤシロ様の敗北となり、2005年は地球最後の年となってしまった。

早澤が言った。

「僕たちは、丸岡の配管工で、園崎家は、雛見沢の配管工だぞ梨花ちゃんはあまり口を出さないでくれ。」

マックスは、驚いた。

「君達は、日本の配管工部隊ということか。」

浅井山は「そつだよ。配管工部隊は、日米に存在するシークレットのような身分だからね。」

浅井山は、ある提案をした。

「テニス家は、未来から来たんだ。僕たちは過去にいる存在なら過去にやっていたことを教えてやるしかないね。」

ケ빈は、気になることがあった。

「日本の配管工なら、バッチ持っているんだろ？」

「持っているよ。」

マックス・テニスは、何かを思った。

浅井山と吉政は、何かが来る気配を感じた。

「下がっていてくれ。」

ベンは、気がついた。

「まさか、DNAリアン。」

ケ빈も「こんなことありえない。」

浅井山と吉政は、エイリアンチップ左手で叩いた。

「ゾンドリーム、俺、参上。」

「ダークペングウィン。」

ベンは、驚いた。

「浅井山と吉政って、オムニトリックスを持っているの？」

そして、DNAリアンを懲らしめた。

早澤が、エイリアン殺害用のナイフを持っていた。

脅すつもりである。

「さあーて、エイリアン君。教えてくれないと殺すよ本気だけど。」

DNAリアンは、脅されたショックで首元をかきむしり死んでしまった。

「これは、まずい。」

金道が、言った。

浅井山はあることに気がついた。

「早澤、もしかしてこのエイリアンは、あの病気にかかったの？」

「しかも、浅井山、これでエイリアンも雛見沢症候群を発症するところが分かった。」

まるおかが動いた頃に

「僕ね、ちょっと君達のことを知りたいけどいいかな？」

「驚くなよベン。」

「えっー君達、エイリアンチップというエイリアンになれる装置を持っていたの。」

吉政は、真剣な顔をしていた。

「実は、僕たちの学校で雛見沢から受け継いだ部活をやっているんだ。」

「そして裏では、こそこそと配管工部隊の仕事をやっているわけ。」

表鹿は、「僕は、配管工の一人じゃないんだ。」

ハイブリッドのデータが、少し揃っていた。

浅井山は、それを解読する役割もある。

「どうやら、気象衛星に配管工のミニロボットをくっつけて正解だったよ。」

ベンは、それを見た。

「よくわからないけど。」

浅井山は、「ベンには、わからないけど。解読するから待ってて。」
ベンは、浅井山は、すごい人だと思った。

「読み上げるぞ。ハイブリード基地から、600体のDNAリアンが丸岡に攻めてくる。おそらく仲間のかたき討ちだろう。配管工部隊にとってこれは一大事だ。」

「非常事態ということになるね。」

みんな、闘いが来る。其の時に備えろ。

浅井山の命令だ。

本気モードでやることにしたが、梨花は、みんなを拒否した。

「ダメ、ここで行ったら日本の配管工は、全滅するわ。」

「梨花ちゃん、それって本当？」

「2005年の運命は、日本の配管工が滅んだあとにおこる地球の惨劇。今は、日米の配管工がそろっている。けど力不足よ。」

ケ빈は言った。「じゃーどうすればいいんだよ。」

「運命を変える力を得なければいけないのよ。」

「確かに、俺達は、それが原因で滅んだのなら、運命を変えるしか

ないようだな。」

圭一は、「運命を変えるなら、俺の仕事だぜ。」

グウエンは、「あなたは、素晴らしい力を持っているようだけど、今回は、桁が違つわよ。」

「大丈夫だって、こまいぬという組織を潰したんだ。」

「今回は、それは賛成できない。」

「魅音。」

浅井山は、「そういえば、脱退させた東沢からこのエイリアンチップを前原、君にやるよ。」

「これで、どうすればいいの?」

「じつするのぢ。」

「ゾンドリーム」

「さあ、やってみてくれ。」

「うん。」

「ヘルミアスーグ」

「これが、エイリアンヒーローか。面白いこれならいけるぜ。」

「さあ、日米配管工部隊のみんなエイリアンを倒す時が来た。」

「ヒーロータイムだっ！」

次回に続くですう。

「あううう、僕が情けないですう。梨花ー」

「ヒーロータイムと言ったものうまくいくのかしら。」

「そこなんですう。」

「心配しなくても圭一さんが加わったら問題なしってところね。」

「次回、まるおかが動いた頃に第二話楽しく会話読むですよー。」

第一話 ヒーロータイムだっ！（後書き）

次回は、展開が少し変わって行きます。

第二話 楽しく会議（前書き）

話の寸法が、ちょっと変ですみません。

第二話 楽しく会議

エイリアンを叩き潰すために日米の配管工が動き出した。

「ヘルミアスーグ」

「よしっ、こいつならやれるぞ。」

「さあ、ヒーロータイムだっ。」

まるおかが動いた頃に

原作 ベン10 ひぐらしのなく頃に 台風X号オールスターズ

制作 まるおかが動いた頃に制作委員会

第二話 楽しく会議

DNAリアンを100匹ずつ潰していった。

ゾンドリームになった浅井山は、DNAリアンを叩き潰していた。

「数が多いが、チームワークならどってこともない。」

DNAリアンは、全滅した。

ベンは「意外とあっけなかったね。」

ケビンにとっても、少し不満足であった。

翌日の放課後。

ベンとグウェンとケビンが加わった部活。

そして色々と盛り上がった結果、罰ゲームを受けたのは、グウェンと紗都子だった。

「ベン、すまんが俺の感情に手を出さないでくれ。」

「なぜだよケビン？」

「メイド服を着たグウェンを見てると俺・・・俺は・・・」

「はつきりいいなよ。」

「おもち帰りいいいい。」

みんなは、啞然としていた。

浅井山と吉政は、予期せぬケビンの暴走に口が開いていた。

一方、早澤家では、日米連合配管工部隊が結成した。

まるおかが動いた頃に

金道は、歩いていると謎のエイリアンに遭遇した。

「マックス・テニスのいるところに案内しろ。さもなければ殺す。」

金道は、エイリアンチップを叩いた。

「ビーストEX!」

「居場所を教えろー。」

「そんな理由で、教えるわけにはいかないんでね。」

「くそつ。」

「おりゃゃ。」

エイリアンは、ビーストEXの持っているスコープに殴殺された。

何らかの理由で、早澤と吉政もエイリアン5体に囲まれていたが、早澤と吉政は、エイリアンチップを叩いた。

「ダークペンゲウイン」

「ゴッドモンドベイア!」

彼らも五体のエイリアンを無残な姿とは言わないが殺して行った。

浅井山家の地下施設から、浅井山邦彦が出てきた。

「どうでしたか、少年の調子は?」

「回復の兆しがものすごく見えてきたよ。」

「ありがとうございます。」

DNAリアンは、今回も400体来ると言われている。

表鹿は、園崎家からもらったエイリアンチップを叩いた。

「モンカカ」

米の配管工は、見覚えのある姿だった。

「まさか、ヴィルガクス？」

「今ではモンカカと改称しているんでね。」

DNAリアン400体がやってきた。

ほかのみんなも戦闘準備にかかった。

ゾンドリームの能力がDNAリアン3体の首を絞めて殺した後、鞭のように叩きつけた。

ヴィルガクス改めモンカカも、ヴィルガクスとは変わらずかなりの強さだ。

「ベン、こんな奴らなんて、檻の中にいる鴨を殺すと同じだ。」

「まあーな。」

ダークペンギンウィンは、DNAリアンを叩き潰した。

日米連合配管工部隊のカッコよさが見えに見えまくっていたため闘

いの素晴らしさがうかがえる。

闘いは、終わった。

日米連合配管工部隊のほぼ全員が寝た。

浅井山だけは、起きていた。

「明後日ぐらい、嫌な予感がする。」

ゾンドリームが「浅井山、どうしてそう考えるんだい？」

「エイリアンがいそうな感じがするからだ。」

「確かになっ。」

次の日の夜。

吉政は、エイリアンチップを叩き、ダークペングウィンになって辺りを探しまくった。

次回予告

「ダークペングウィン、無事に何かを見つけるといいのですが？」

「大丈夫よ。浅井山が気にしていたエイリアンも登場だし。」

「ついに、フォースモードが……」

「これ以上しゃべると唐辛子入りご飯の刑よ。」

「ひどいですう。梨花。」

「次回、まるおかが動いた頃に第三話フォースマード登場。見るのですよー。」

「SDという名前のエイリアンっなにょ？」

「ネタばれしないでほしいですう。」

第二話 楽しく会議（後書き）

次回もお楽しみに。評価を宜しく

第三話 フォースモード登場！

ダークペンゲウインは、あるものを見つけていた。

それは、DNAリアンの持っていた恐ろしいものだった。

Ben 10 third burst まるおかが動いた頃に

第三話 フォースモード登場！

学校から帰ってきた浅井山は、急いで配管工基地に行った。

吉政と金道が待っていた。

「遅いよ。」

「ごめん、車の通りが若干多かったから。」

ベンと圭一は、DNAリアンの行動パターンを確認していた。

「明らかに、変じゃないか。」

「何処か？」

「DNAリアンの行動、これって地球を冷やそうと企んでいるんじゃないか。」

浅井山は、コンピューターを素早く打ち、データを調べていた。

DNAリアンの一体が、侵入してきた。

浅井山は、エイリアンチップを叩き、ゾーンドリームになって、DNAリアンを追い出して、戦いとなった。

DNAリアンとの戦いは、何故か苦戦を強いられた。

ゾーンドリームが一つ思った。

「そういえば、寒いな。分かったぞ、既に実行進めているな。」

エイリアンチップがあった場所から輝きが見えた。

「これは、何だろう。」

それをたたいたゾンドリームは、フォースモードになった。

両腕を木のように硬くして、DNAリアンをやっつけた。

ゾンドリームから戻った浅井山は、ある事を話しに行った。

次回

エイリアンの企むこと

第三話 フォースモード登場！（後書き）

次回もまた見てね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8404j/>

Ben10 third burst まるおかが動いた頃に

2010年10月11日17時12分発行